

長岡市厚生会館地区整備設計コンペティション

提案審査講評

平成 20 年 1 月 30 日

長岡市厚生会館地区整備設計コンペティション審査委員会

全体講評

このコンペには、“中心市街地活性化の起爆剤”にしたいという市の熱い思いが託されている。具体的には、「公会堂」、「市役所」、「広場（一部、屋根付き）」という異なる施設を複合一体化することで、市民、行政やまちづくり関係者などが日常的に交流し協力関係をつくる場を実現することである。これを市は、『21世紀の市民協働型シティホール』と呼んでいる。また、コンペの対象地区は、長岡市中心市街地で JR 長岡駅に近接し、市の目抜き通りである大手通りに正面を向け、市民にも来訪者にも利用しやすい場所である。現在この場所には、昭和33年以来長岡市民に親しまれてきた厚生会館があり、新しい施設にもこの役割を引き継ぐことが期待されている。一方、平成16年10月に発生した中越大震災や、このコンペを開始した直後の平成19年7月に見舞われた中越沖地震の教訓を踏まえて、避難場所としての機能を備えることも求められている。

このように意欲的なプログラムの実現を求めるコンペに対して、67者から力のこもった応募を頂くこととなった。応募された方々に感謝し、御礼を申し上げたい。

このような『21世紀の市民協働型シティホール』の実現のため、審査委員会は（1）設計者がコンセプトを十分に理解し、それを実現させる能力を有するかどうか、（2）提案された厚生会館地区に求められる課題を建築的に創造的に解決しているか、という両面から、提出された書類と公開ヒアリングと質疑応答内容を厳正、慎重に審査した。その結果、設計予定者として最優秀者に株式会社隈研吾建築都市設計事務所を、次点者に有限会社澤岡建築都市研究所をそれぞれ長岡市に推薦した。

今後は、本委員会で指摘された以下に記す様々な課題や市民等の意見を踏まえつつ、市民の皆様から末永く愛され、誇りとされる施設の完成にむけて努力を傾注され、優れた手腕を十分に発揮されることを期待する。

個別講評

最優秀者

株式会社隈研吾建築都市設計事務所

株式会社隈研吾建築都市設計事務所（意匠設計担当予定者：隈研吾氏）は、表通りから一皮入った会所地的な敷地でなければできないユニークな公共施設のあり方を提示し、今後の各地の中心市街地活性化のモデルにもなりうる構想を示した。二次審査におけるヒアリングでの応答や設計者のこれまでの実績からも、今後の市民との協働に柔軟に応じられる姿勢を持った設計者であると判断した。

構想提案は、(1) 各所に緑や光を取り込みながら、大手通りから奥に自然に導かれるよう大きな土間的な空間を中心に据えている、(2) 多様な市民活動や行政活動に取り囲まれた一体感のある空間を実現し、行政と市民との垣根をなくし市民と協働する時代の「ハレの場」を実現している、(3) 「ながおか市民センター」の理念の延長にある商業施設に通ずる気安さを備え、多様なイベントを受け入れることのできる広場を作り上げている。その結果、これまでの行政施設の概念を大きく変え、市民が主体的に作り上げる場になりうると評価した。このような空間特性は、長岡市の推進する『まちなか型公共サービスの展開』という、「公と民」が一体となって行うまちづくりの方針とも合致するとの評価もあった。

ガラスと杉材による市松模様の可動屋根が織り成す内部空間は、魅力的かつ特徴的であるが、建築費や維持費について懸念が示された。提案の魅力を失わないように注意しつつも、現実的な解決が必要である。同時に、アリーナと屋根付き広場との視覚的連続性の確保にむけて、更なる努力が期待される。また、周辺既存建物との関係についても十分留意されて、今後の協議、調整を通じて高いレベルでの解決が期待される。

まちの“中土間”

長岡の新しい市庁舎は、まちの“中土間”になります。

“中土間”とは、建物に挟みこまれるようにして配置されている形式の土間のことをいいます。庭のようでも部屋のようにもあつた空間は、物を作ったり、運動をしたり、炊事をしたりと、様々な用途で使われました。また、そこでの活動が外に染み出すことで、周辺との緩やかなコミュニティを形成していました。私たちは、時代の流れの中で失われた土間のような空間を、新しい公共の空間として再現させます。

市役所に用事がある人、アリーナにスポーツを見に来る人、ダンスの練習をする人、芝生で弁当を食べる人、ちょっと通りすがりの人、みんなが一つに集まってくる。気軽に立ち寄り、活動できる空間として、私たちは新しい市庁舎を計画します。



市民を引き込み通りに置いた大きなエントランス



行会の上は市民に開放された屋上庭園



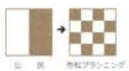
市民の集いの空間となる屋敷から出た「空中いりり」(課題1)

まちに開けた“中土間”



中央に大きな広場をとることで、まちのどろからでも簡単にアクセスできるようになっています。特に、車の中を走る大通りからの開口を大きくとり、たくさんの人を受け止められるようにしています。また、一方から来た人がそのまま別方向に通り返せることもできる計画されています。

公と民のモザイク



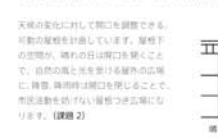
市役所的な機能と市民活動的な機能を市役所のように交ざり合ったプランニングになっています。市役所の人、市民が活動する場所のそばというようにすることが実現されます。市役所チームは壁面や大屋根の「ガタン」として役割、「公と民の市松模様」を実現にも理しています。

ひろばを覆う地元産材の「すむしこ屋根」



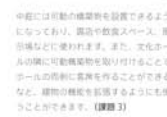
広場には「すむしこ」のように屋根を斜めに作られた、大きな屋根をかきました。車道により屋根の下は空間は車でも家でも、快適に活動できる場所になります。屋根は長岡産の木材と、地元の工場で作った鉄を組み合わせたものであり、地域を活性化させる地産地力取り組みです。

可動の屋根によるパッシブな設備計画



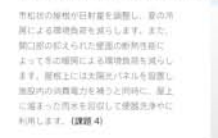
気候の変化に対応して開口も調節できる、可動の屋根を計画しています。屋根下の空間が、晴れの日は開口を大きくすることで、自然の風と光を射ける屋外の広場に、晴雨、曇雨時は開口を閉じることで、自然活動を妨げない屋根付き広場になります。(課題2)

可動の構築物「にわの屋台」

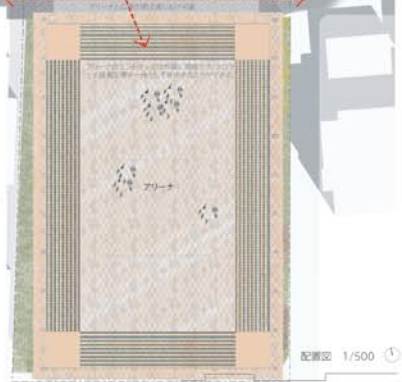


中庭には可動の構築物を設置できるようにしており、展示や飲食スペース、展示場などに使われます。また、文化ホールの隣の可動構築物を取り付けることで、ホールの裏側に書庫を作ることができると、建物の機能を拡張することも使えます。(課題3)

気候の変化にパッシブに対応する設備計画



可動の屋根が日射量を調節し、夏の消費による冷暖負荷を減らします。また、開口部の部入れられた壁面の断熱性能によって冬の暖房による暖房負荷を減らします。屋根上には太陽光パネルを設置し施設内の消費電力を補うと同時に、屋上に溜まった雨水を回収してトイレ洗浄や利用します。(課題4)



次点者

有限会社 澤岡建築都市研究所

有限会社澤岡建築都市研究所（意匠設計担当予定者：澤岡清秀氏）は、大手通りから街区の内側に向かって、個性的で多様な公共空間を3次元的に連続させ、人々を誘い込み、多様な活動の場が緊密に結び合わさる構想を提案した。

このコンセプトと綿密にまとめた手腕が高く評価された。特に、構成する各施設の配置計画についても、利用者の意向をよく汲み取り、使いやすく堅実でありながらも、夢のある魅力的な提案である。

また、まちづくり・合意形成の専門家を協力者に組み込む体制についても、市民の意見などを踏まえながら、設計を円滑に推進していくうえで大きな期待が寄せられた。

最後まで隈研吾建築都市設計事務所案とのあいだで比較検討されたが、最終的には、本案が長岡市の求める“行政と市民との垣根をなくし市民と協働する時代の「ハレの場」”であるかどうかという点で、最優秀案との間に差が認められた。また、提案建物と街区周辺既存建物との関係も、大きな懸念材料として指摘された。以上により、最優秀者として推薦するまでには至らず、次点とした。

NAGAOKA CIVIC PLACE

内なる広場からの再生



市民の豊かなパブリックライフを育む場所

私たちは、長岡の駅前に市民が自然に集い、交流することのできる長岡市民のパブリックライフの中心を創りたいと考えます。

目的を持って市役所や公会堂を訪れた人々が、座敷付き広場で行われているバーガーイベントに偶然出くわして参加したり、文化ホールにコンサートを聴きに来た人々が、市民活動ホールで料理教室のレッスンを受けている人たちと出会い広場に面したカフェで話し込んだりして、新たな人との輪が広がっていく・・・そんな何気ない市民のふれあいや発見がそここで生まれ、人々の日常の生活をより豊かにします。

そんな市民の豊かなパブリックライフの積み重ねが、この施設を「空間（スペース）から市民の場所（プレイス）」に変えてくれることを確信して、この施設を「市民のための場所＝シビックプレイス」と名付けて計画します。

既存街区の内側に新しいパブリックスペースを展開させる【課題1・3】

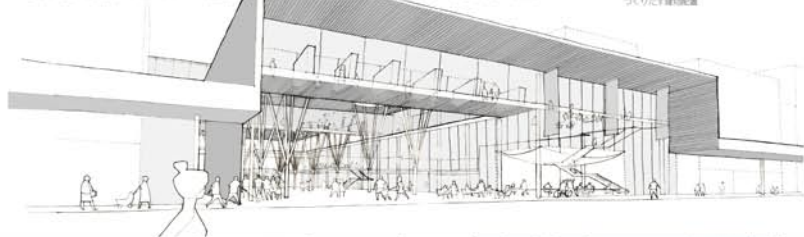
私たちは周囲を既存の建物で囲まれた街区の内側という本拠地特有の場所の特性を活かし、そこに、広場、座敷付き広場、アリーナ（公会堂）、市民活動ホール、市役所の総合窓口やアトリウムなど多様な空間を人々の活動の場として挿入し、それらを通り抜け道路（パッサージュ）によって緊密に結び合わせてネットワーク化します。このネットワーク化した空間は、市民が参加し、主役となる都市空間に開かれたパブリックスペースであり、市民のパブリックライフの場（インフラ）として、都市空間の「地」ではなく「国」として機能することになります。私たちは、このような「国」としてのパブリックスペースを長岡におけるアーバンデザインの元型「シビックプレイス」と考え、このネットワークが周辺市街地に波及していくことで、さらに多様なパブリックライフが生成され、長岡市の中心市街地の活性化が促進されると考えています。



国としてのパブリックスペースをつくりだす建物配置



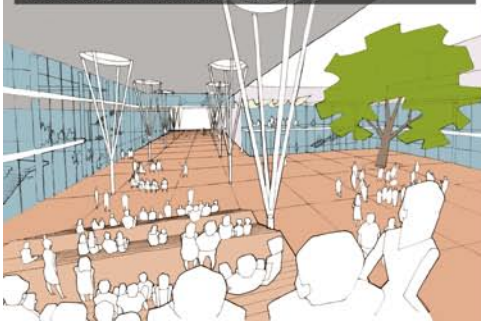
連続ネットワークが周辺に広がる



大手通り側の街並み

駅前から伸びる大手通りに対するファワードは、既存の街並みに対して大きく開いて人々を呼び込むように計画します。大手通りから導かれた人々は細長いギャラリー状の座敷付き広場（こもれび広場）を経由して、スクエアな座敷のない広場（うちみず広場）へそのまま導かれます。さらにこの二つの広場は東西南北に伸びる歩行者用の「パッサージュ」によって敷地の両端と結びつけられ人の流れは両端へと広がっていきます。

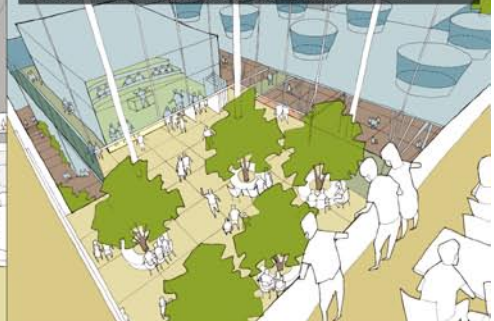
「こもれび広場」と「うちみず広場」【課題2・3】



パブリックスペースを取り巻く市民ロビー：「サーキットロビー」【課題1】



シビックアトリウムと連続する大手通り沿いの議場配置【課題1】



「シビックプレイス」の中心に、座敷付きの「こもれび広場」と座敷のない「うちみず広場」を提案します。二つの広場はパブリックスペースの中心となり、形状と機能の両方において相互に密着し、相乗効果を持つことを目指します。「うちみず広場」は座敷付き広場の付随的な広場であり、必要に応じて使い水を運ぶことのできる設備をもち、夏には打ち水をしたような効果をもたせたい。冬には水溜りを調整して露草に育むことができる設備をそなえたオープンスペースとします。樹木をイメージした柱を支えられた「こもれび広場」の屋根はトランプリートを骨格としてハイサイドの自然光を取りこみ、一年中明るい広場をつくりだします。ハイサイドライトは夏の直射光を遮り、冬は積雪と大風が当たって屋根の下の空間を明るく照らします。「こもれび広場」の奥にある大階段は、公会堂アリーナ客席へのアクセスルート・避難経路であるとともに「こもれび広場」や「うちみず広場」で来客まつり、ジュニアコンサート、結婚式などが行われる際には観客席や舞台となります。

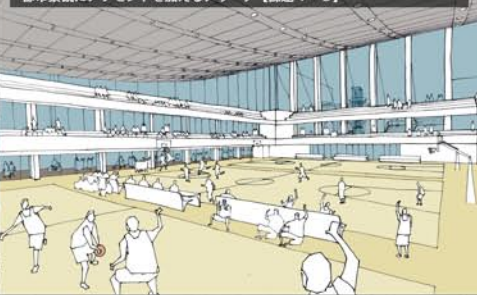
「こもれび広場」と「うちみず広場」を取り囲むような形式で、両側の市民ロビーを提案します。この市民ロビー＝「サーキットロビー」は、大手通りから導かれたカフェインフォメーションから始まって、市役所・公会堂・市民活動ホールの各施設を文字通り相互に「回遊性」をそなえた立体回廊となります。またそこは各施設の内部空間と外部・半外部空間の間に採った緩衝ゾーン＝中間領域となり、市役所の事務時間や公会堂の使用状況がかわら、一日中市民に開かれていて賑わいを提供します。「サーキットロビー」は、最小でも6mの幅をもつ回廊状の空間でありながら、ところどころに人が滞留する場所をつくりだし、待ち合わせ、休憩、読書、読書、打ち合わせ、展示などに活用できます。また市民活動ホール、市役所の総合窓口、公会堂ロビーなど、それぞれの場所で一体的に利用可能なスペースであり、中間領域は広場の境界となるガラスをフルオープンすることによって広場と一体的に利用することもできます。

「2」世紀の市民協働型シビックホールを象徴するように、市民・市議員・市議会議員が相互に交流できるような空間配置を提案します。市役所の2階が市民協働型議場（議場）に、市議員を招く「シビックアトリウム」をもちます。市民と市議員がともに休み、笑い、語り合える空間とします。シビックアトリウムは大きなガラス面の側面を緑のカーテンで覆い、樹木をふんばんに取り込んだ家具を配置します。このシビックアトリウムに隣接して、大手通りに向けた3階に市民協働の議場を配置し、それぞれの地方自治に合わせた機能の提案を目指します。議場の周囲は市民が回遊できるロビーとし、大手通りから直接アプローチできるようにします。またこの議場は、議会開催期間外には、ミニコンサートや講演会などのために多目的に有効に活用することができます。また、シビックアトリウムからブリッジで市民活動ホールの3階に直結することができるので、そこにたどり着くための回遊経路を設けます。これは「まちなか型公共サービス」を実現するためのスペースとして、NPO、民間、各種団体も使えるようなものとなります。

多種多様なイベントに対応できる市民活動ホール【課題3】



都市景観にアクセントを加えるアリーナ【課題4・5】



街区を通り抜け、周辺とつながるパッサージュ【課題3】



市民活動ホールは、うちみず広場に面して字形的に配置します。様々な種類の委員会、教室、会議、イベントの受け皿として、大ささまざまなスペースを可変的に切り分け、さらに2種類の天井高を備えて様々な用途に対応できるようにします。文化ホールはその中の一つでありながら、通常可能なスペースとして単独で利用できるようにし、水エフェクト、カフェと連続してサーキットロビーとも一体的に利用できます。

公会堂アリーナの屋根は、構造計画・設備計画・防災計画とともに、都市景観の中で特徴性を重視し、多くの人を惹き入れる形態としています。雪を堆積することも考慮した構造合理性に富んだ形態として、インテリジェントな軽減も図っています。屋上部分は池尻型を、アリーナレベルには外気取り入れ口を設け、自然な空気が流れつくつくりだし、夏期には電力効率を促進させ、ランニングコストを抑える層間状態としています。

観客席は、スポーツイベントを見るのに最適な形態を基本とし、特にプロバスケットボールの試合を見るのに適した長手メイスタンク型に多くの観客が収容できる配置としています。アリーナレベルは、観客・避難、災害時の利用を考慮して3階レベルに設けています。階間は「パッサージュ」が面しており、アリーナで行われている日常の活動を「パッサージュ」から眺めることができます。ホテルロビーは、「パッサージュ」に面した活動溢れる都市的スポットとなります。

配置平面図・1階平面図【総論計画】

大手通りに向けて大きく開かれたエントランスから「こもれび広場」と市民ロビーが平行して、人々を街区の内部へ誘い込みます。やがて「うちみず広場」へ導かれるこの空間のシークエンスが、豊かな「ブリックスペース」へ展開していきます。



2階平面図

市庁舎、市民活動ホール、文化ホール、アリーナの2階はすべて同レベルで接続されスムーズな利用を促します。イベント時には2階がメインエントランスになります。



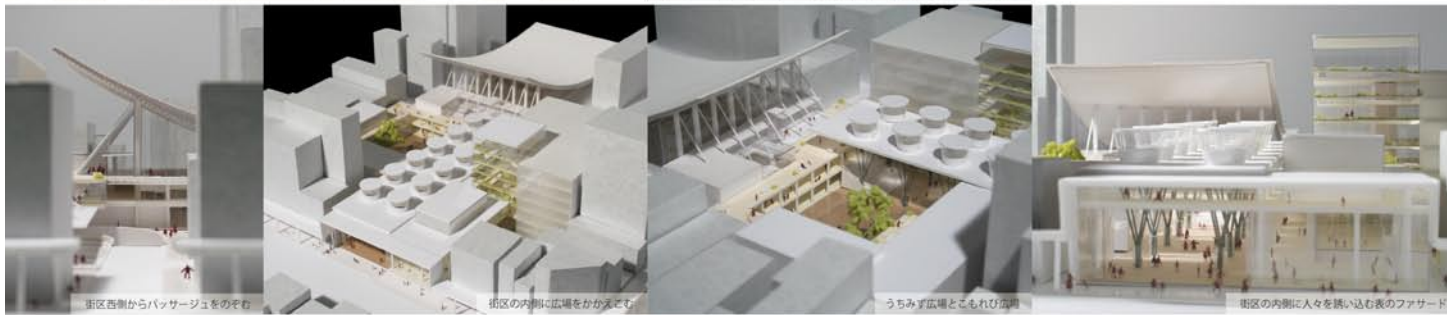
3階平面図・4〜7階平面図

市職員と市民が交流できるシビックアトリウムは、議場と直結し、ブリッジによって市民活動ホール上階の市役所会議室に直結し、広場を見渡しながら会議ができます。



地下1階平面図

駐車場は、市道1号線に出入口を設け公共用と公用車用にゾーニングし、公用車用ゾーンは市役所下部に配置します。車椅子使用者等は地上に2台、地下に3台、計5台配置します。地下2階にエネルギーセンター(機械室、電気室等)として約1200㎡を設けます。



構造計画

こもれび広場の構造

こもれび広場は地上より四角柱状の鉄骨フレームを連続的に配置し、これと層階差を構成するグリッド状の格子により立体的な空間を形成することで、開放的でかつ遮陰スペースを造ります。

大屋根の構造

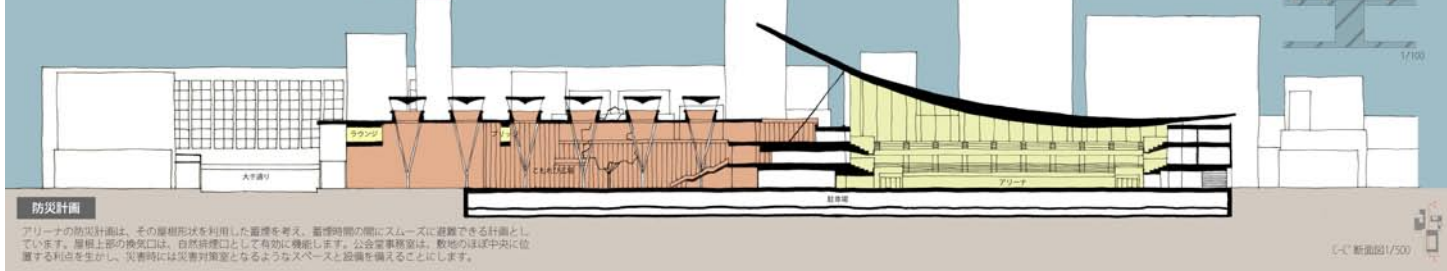
ゆるやかな反りを持つ大屋根はアリーナ全体を覆うと同時に広場側にも大きく取出し、冬期晴天時でも屋外広場「こもれび広場」と一体となって、雪の白い明るい屋外スペースをもたらします。大屋根は円成りのカーブを描く下位の鋼製トラスの連続で構成され、下対称をプレートで形成することでシフトシフト連続としても活用し、同時にゆるやかな反りを持つ天吊梁を形成します。トラスは懸垂梁として2次元で支えられ、懸垂梁の両端が特長を持つとすることでトラスの鉄骨量を低減させます。突如に発生する水平力(スラスト)は木柱と鋼骨ケーブルで抵抗します。また屋根の取出し部分に発生する曲げモーメントを中央スリットの発生モーメントと釣り合わせることで、より合理的で確実な大屋根の構造を形成します。

免震構造

本館は防犯施設であることから最高レベルの耐震性が要求されます。地下1階は建物全体に渡って駐車場であることからこの層を免震層とした免震構造を採用します。これにより大震時において建物の損傷がないことに加え、庁舎・市民の避難するアリーナおよび他のスペースも機能を維持しやすき使用が可能になります。

防災計画

アリーナの防災計画は、その屋根形状を利用した避難を考え、避難時間の間にスムーズに避難できる計画としています。屋根上部の換気口として有効に機能します。公衆避難経路は、数秒の遅延中に位置する利点を生かし、災害時には災害対策室となるようなスペースと設備を備えることにします。

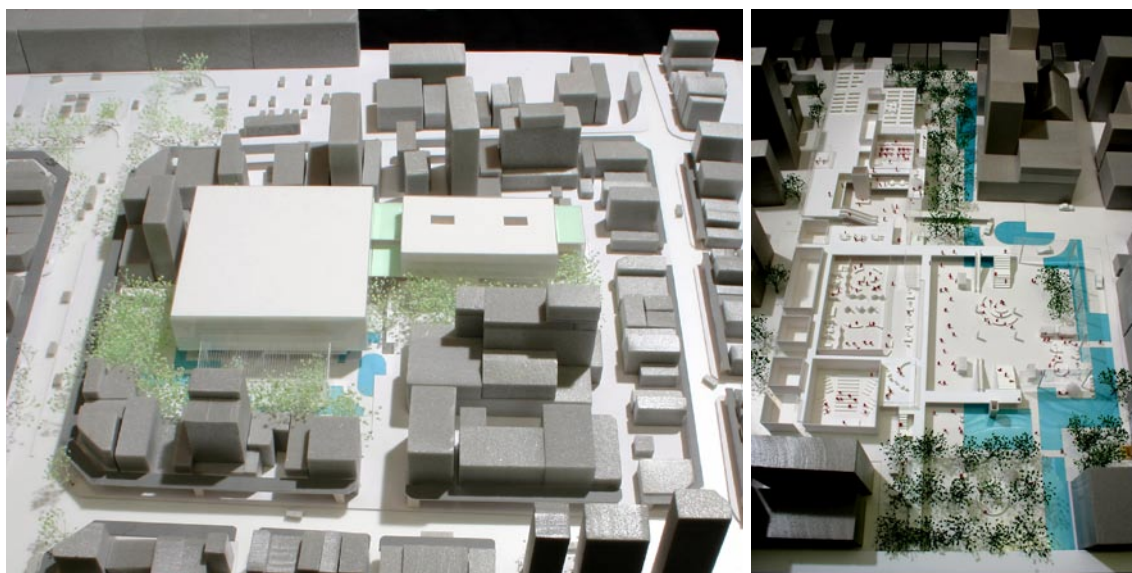


■ 株式会社 現代計画研究所

株式会社現代計画研究所（意匠設計担当予定者：藤本昌也氏）は、大手通りから対象地区を貫通する「ナカミセ」ストリートを十字に通し、街区周辺建物との間には空地を巡らし、敷地を田の字に4分割することにより、街区内部に「まち」をつくるような構想を提案した。

これは、都市建築としての作法を守った提案であるとして高い評価を得た。また、西側には往時の堀を思わせる水面を計画し、歴史的記憶の継承を試みている。施設内部では、「ナカミセ」ストリートの周りに諸室を配置することで、明快な機能的関係を作り上げ、アリーナを2階に配することで、広々とした地上階を作り出し、市民活動スペースと市庁舎、屋根付き広場の間におおらかで密接な関係を実現している。

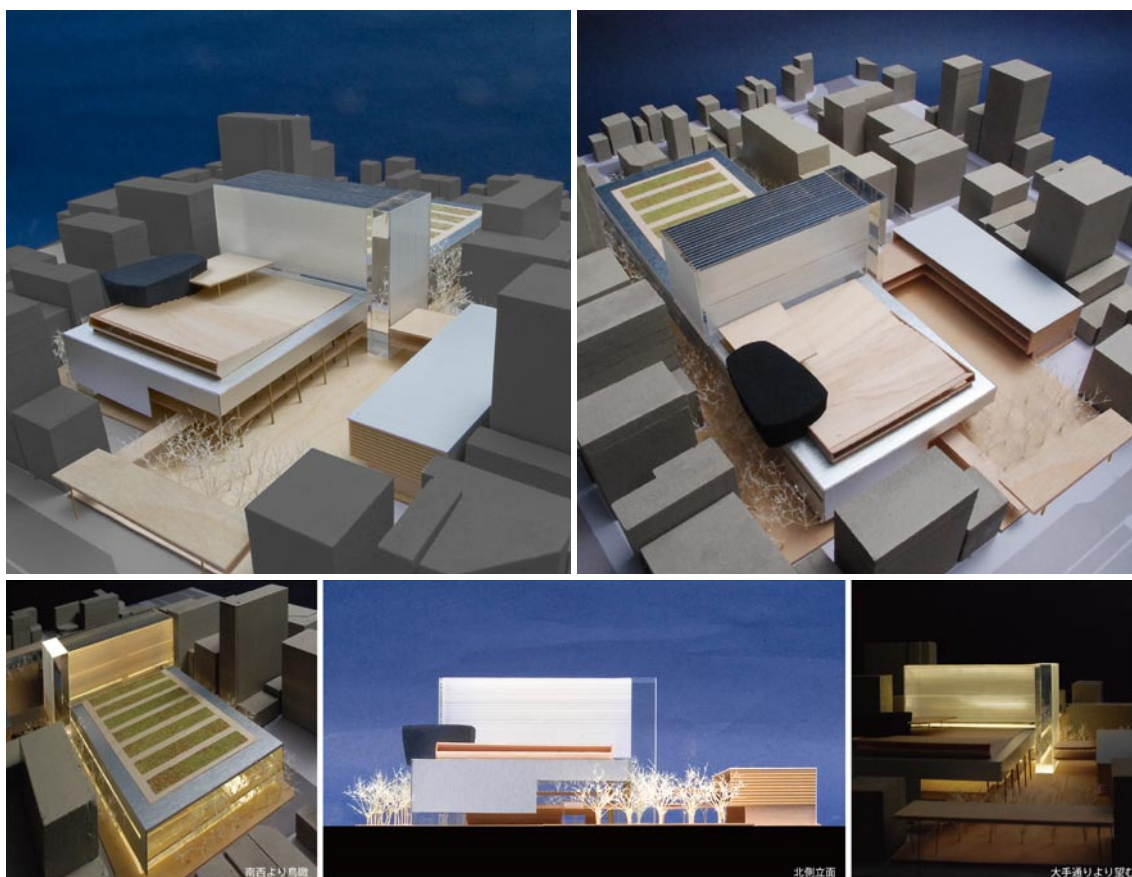
このように優れた提案であるが、2階に配したアリーナへの導入の建築的処理に対する疑問、周辺に巡らされた空地と水面を介して見上げる既存建物の裏側の壁面の眺めに対する疑問を覆すには至らなかった。



■ 株式会社 岡部憲明アーキテクチャーネットワーク

株式会社岡部憲明アーキテクチャーネットワーク（意匠設計担当予定者：岡部憲明氏）は、主要施設をひとつにまとめたメイン棟と議会棟との間に、囲まれた広場を配することにより、市民や行政の創造的な活動が、施設内外で一体的に展開する非常に明快な構想を提案した。

与条件を踏まえ、綿密に計画を練り上げた論理的な構成手腕が評価されたが、その反面、整然と過ぎているがゆえに、市民が気軽に集まる場所に行政も同居する「ながおか市民センター」のような混在性を否定しているのでは、という意見が出された。また、市民活動スペースどうしと広場との繋がりや、この案の特徴となっている屋上の広場の有効性などの疑問も解消されなかった。



■ 株式会社アール・アイ・エー東京支社

株式会社アール・アイ・エー東京支社（意匠設計担当予定者：仁科和久氏）は、アリーナ下の屋根付き広場と市庁舎の屋上の階段広場を「アゴラ」（古代ギリシャの都市国家の中心広場）とよぶ階段状広場で連結し、市民と行政を有機的に結び付けようとする構想を提案した。

大手通からもアリーナのピロティ空間（屋根付き広場）を通して大階段が見え、庁舎の上層階にまで繋がる空間構成は、明快かつダイナミックであり、ローマのスペイン広場のような独特な空間になる可能性があると評価された。また、ピロティ周辺に市民ロビー等を配することで、建物内外の活動が密接に関係することも評価された。

しかし、アリーナを上層階に配した結果、アリーナと広場との一体的利用が困難になってしまったことや、近隣建物への配慮の不足、避難動線の不明確さなど、構想が未消化であることが指摘された。

